

朱熹の気質論

——感じ、思考し、運動する気のメカニズム——

文学研究科中国哲学専攻博士後期課程2年

辻井 義輝

1. はじめに

朱熹（1130～1200）の哲学において、我々が具有する性理の完全性に対して、気質の稟（気質の受け方）が問題に取り上げられることは周知の事実である。気質とは端的に言って身体に他ならないが、そこにおいては、こころと身体を単に心身症等の範囲に限定することなく、密接な有機性の下で捉えていたことがうかがえる。そのみならず、気質について、よく塞がるとか、通るなどと言われたり、あるいは魂や魄などといった概念が持ちだされてきたりして、我々の捉えるそれと大幅に異なる枠組みのもとで言われていたことも窺える。この気質の問題は、朱熹が私意、私欲の問題を気質の問題として言っていたり、またこのような気質を変化させることが学問をする目的だといわれていたりしている経緯からして、朱熹の哲学を理解する上で、決して周縁的な問題などではなく、むしろその哲学における基礎的な位置に立つものと言わねばならない。

朱熹の気質についての本格的な研究は、三浦國雄氏（1981）が先鞭をつけ、問題に与る資料を広範に提示・分析して道を開き、さらに、その論述に対する批判を含みつつ、従来の研究における朱熹哲学像そのものに根本的な転換を迫った木下鉄矢氏（1992）の業績があり、また、石田秀実氏（1987, 92）は、朱熹哲学そのものは研究対象に入れてはいないものの、漢民族によって伝統的に形成された身体観を主に中国医学を中心に分析を施し、朱熹の気質論にも通じるその独特な世界を明らかにした。さらに、吾妻重二氏（1984）、市来津由彦氏（2004）は、それぞれ周易参同契、知覚説を研究対象に取り上げながらも、朱熹の気質観についても重要な示唆を呈している。

しかしながら、従来の研究においては、塞がる・通るということや、私意・私欲、学問の目的である気質変化や、こころとの連関性、魂や魄といった事柄が、気質という同じ概念のもとに言われているにもかかわらず、これらに通底する気質論そのものを明らかにすること

はなされることはなかった。そこで本論では、従来の先行研究の成果を受けたうえで、この点に着目し、その前提作業として、朱熹が気質という概念を通して、人間という個体がどう成立していると考えていたのかそのメカニズムを明らかにし、さらには、塞がる・通ると言っているのはどういうことなのかを明らかにすることを目的とした。

(なお、本論において使用した引用文は全て『朱子全書』上海古籍出版社・安徽教育出版社、2002による。)

2. 朱熹の気質論

1) 相関するところと気

朱熹は、このようにところと気を連動させて捉えていた。

例文1

心は気のエッセンスである。

心者、氣之精爽。(『朱子語類』巻5 (14巻. p. 219))

例文2

質問した、「先生は先日扇子を煽ぐのは気であるとお考えになっていましたが、甘節(わたくし)があとで考えましたところ、心が思うのも、耳が聴くのも、目が見るのも、手が持つのも、足が踏むのも、気ができることではないように思います。気の運行には必ずこれを主宰するものがなければなりません。」答えた、「気の中にもともと靈妙な働きがあるのだ。」

問：「先生前日以揮扇是氣，節後思之：心之所思，耳之所聽，目之所視，手之持，足之履，似非氣之所能到。氣之所運，必有以主之者。」曰：「氣中自有箇靈底物事。」(『朱子語類』巻5 (14巻. p221))

以上のように朱熹にとって、気は、ほかの何ものに拠ることなく、気だけで動作性・精神性を有しているものと考えられており、ところも、視覚作用も、聴覚作用も、動作・行為も、のような気に拠る働きに他ならないと捉えられていたことが窺える。

それでは、朱熹にとって、そもそも気とはどのようなもののことを意味していたのであろうか？

2) 気と生命

朱熹は、気についてこのように発言している。

例文3

屈んだり、伸びたり、往ったり、来たりするのが気である。天と地の間にあっては、気でないものはないのである。人の気と天地の気は常に連続しており、(そこに)断絶はないが、人には見えない。人の心が動けば、必ず(天地の)気に達するのであり、この屈んだり、伸びたり、往ったり、来たりしているものと互い感通するのである。たとえば、卜筮などは皆、心にもともとこのもの(気)があって、ただ君の心の内容を話しさえすれば、動いて、(天地の気が)必ず応じるのである。

屈伸往來者、氣也。天地間無非氣。人之氣與天地之氣常相接、無間斷、人自¹不見。人心才動、必達於氣、便與這屈伸往來者相感通。如卜筮之類、皆是心自有此物、只說你心上事、才動必應也。(『朱子語類』卷3 (14卷. p154))

ここから窺えるのは、朱熹は、楠本正継氏(1964)²、が分析する通り、気を何より、万物の構成素材として捉えているということである。そして、それには、屈んだり、伸びたり、往ったり、来たりする働きがあるのだという。この働きとは、気の感応のことであるが、我々もこのような感応する天地の気に何の断続もなく直接に連続するのだという。

そして、我々の個体の成立については、朱熹はこう発言している。

例文4①

人が発生するのは、理と気が合わさるからである。天の理はもともと広大で極まりがない。しかしながら、この気がなければ、たとえこの理があったとしても、宿る場所がない。だから、必ず二気が感応し凝結、集合してはじめて、理は付着する場所をもつのである。人が言葉を働かせ、動作し、思考し、さまざまなことを取りさばくことができるのは、全て気(の働き)であり、理はそこにあるのである。だから発動して、孝、弟、忠、信、仁、義、礼、智となるのは、全て理(の働き)である。

人之所以生、理與氣合而已。天理固浩浩不窮、然非是氣、則雖有是理而無所湊泊。故必二氣交感凝結生聚³、然後是理有所附著。凡人之能言語動作、思慮營為、皆氣也、而理存焉。故發而為孝弟忠信仁義禮智、皆理也。(『朱子語類』卷4 性理一 人物之性氣質之性 (14卷. p194))

例文4②

性は理に他ならない。しかし、天の気と地の質がなければ、この理は落着する場所がない。

性只是理。然無那天氣地質、則此理沒安頓處。(『朱子語類』卷3 (14卷. p195))

例文4①における二気とは、気の2つの様態(陰、陽)のことに他ならない。これに対応して、例文4②では、天の気、地の質といわれているが、これは、一般に陽は天に対応し、

陰は地に対応するといわれるため、二気と同じことを指している。言い換えれば、朱熹はわれわれの個体は、天地の感応する気からできており、また天地の感応する気と直接連続しているわけであるが、具体的には天に由来する気と地に由来する質との2つの気の感応によって成立していると考えていたわけである。

個体の成立の過程については、朱熹はこう発言している。

例文5

陰と陽が交わり始めると、天一が水を生じる（『易経』繫辞上9）。（このように、）生きものが発生して、化変し始めると魄と言う。魄を生じたら、暖かくなっているものが魂だ。先に魄があって後に魂がある。だから、魄は常に主たるものであり、根幹を担っているのだ。

陰陽之始交，天一生水。物生始化曰魄。既生魄，煖者為魂。先有魄而後有魂，故魄常為主為幹。（『朱子語類』卷3（14卷. p164））

上記の魂・魄とは後述するように、それぞれ天の気と地の質を支配するもののことである。このことから、朱熹が、発生の時は、三浦國雄氏（1981）⁴もすでに紹介しているように、天の気と地の質の感応を通じて、まず地に由来する形体が形成され、それに伴って魄ができたなら、次に天の気に由来する魂が形成されると考えていたことが窺える。

さらに、成立した個体の成長については、朱熹はこう言っている。

例文6

「鬼神は造化の迹なり」（程伊川『易伝』乾卦）。「神」とは「伸」のことである。その伸びることゆえである。「鬼」とは「帰」のことである。その帰ってゆくことゆえである。人は誕生してから、その身において天地の気がひたすら増え続け、しだいしだいに大きくなり、しだいしだいに成長してゆく。究極にまで至ったら、しだいしだいに衰弱し、しだいしだいに散じてゆく。

「鬼神者，造化之迹。」神者，伸也，以其伸也；鬼者，歸也，以其歸也。人自方生，而天地之氣只管增添在身上，漸漸大，漸漸長成。極至了，便漸漸衰耗，漸漸散。（『朱子語類』卷63第16章（16卷. p. 2087））

このように、朱熹は成立した個体は、極点に達するまで増え続け大きくなるが、極点を過ぎると、しだいに散じ、衰弱してゆくと考えていたことが窺える。ここから朱熹が、総じて、我々の個体の成立・崩壊を天地における感応の働きと全く同じ原理で捉えていたことは明瞭である。そして、その崩壊の際は、天地において気が集まったあと、必ず散じきって跡形もなくなってしまうように、人間の気も散じてやがてなくなってしまうことになる。

例文7

人にはただたくさん気があるに過ぎないのであって、必ずなくなるときが来る。医者という陰陽が昇ったり降ったりしなくなるというのがこれにあたる。なくなってしまうえば、魂と気は天に帰り、形と魄は地に帰って死ぬ。人が今にも死のうとしているとき、熱気が上に出るのは、いわゆる「魂が升る」である。足が徐々に冷えてくるのはいわゆる「魄が降りる」なのである。これが、生があれば必ず死があり、始めがあれば必ず終わりがある理由なのである。

人只有許多氣，須有箇盡時；明作錄云：「醫家所謂陰陽不升降是也。」盡則魂氣歸於天，形魄歸于地而死矣。人將死時，熱氣上出，所謂魂升也；下體漸冷，所謂魄降也。此所以有生必有死，有始必有終也。（『朱子語類』卷3（14卷. p. 158））

ここにおいて気が散じるというのは、より具体的にいえば、魂と気が天に帰り、形と魄が地に帰ることであることが明らかにされているが、それでは、これらの諸項を通じて、具体的には個体はどのように形成されているとされるのであろうか？

3) 氣質魂魄論

①気・質、魂・魄の役割

個体を形成するアイテムについては、朱熹はこのように概括している。

例文8

しかしながら、気には澄み・濁りがある。気の澄んだものが気であり、濁ったものが質である。澄んだものが陽に属し、濁ったものが陰に属する。知覚、活動は陽のしわざだ。形体（骨、肉、皮、毛）は、陰のしわざだ。気は魂といい、体⁵は魄という。『淮南子』説山訓の高誘の注には「魂は陽の神である。魄は陰の神である。」とある。いわゆる神とは、身体を支配するから（言うの）である。

（明作錄云⁶：「然氣則有清濁。」）氣之清者為氣，濁者為質。（明作錄云：「清者屬陽，濁者屬陰。」）知覺運動，陽之為也；形體（明作錄作「骨肉皮毛」），陰之為也。氣曰魂，體曰魄。高誘淮南子注曰：『魂者，陽之神；魄者。陰之神。』所謂神者，以其主乎形氣也。（『朱子語類』卷3（14卷. p. 158））

内容を要約すると、ここにおいては、気には澄んだものと、濁ったものがあるとされ、気の澄んだものは気と呼ばれ、これは陽に属するとされ、知覚、運動を働かすとされている。そして、このような気を支配するものとして、魂があげられている。また、気の濁ったものは質と呼ばれ、陰に属するとされ、形体（骨、肉、皮、毛）を作り上げるとされている。このような質を支配するものとして、魄があげられている。ここで言われている、気・質とは

明らかに、上述の天の気と地の質にあたるだろう。

ここにおいては、知覚・運動を働かすのが気であり、形体を作り上げるのが質であるとされるが、それらを支配するものとして、それぞれ魂・魄が掲げられているので、実際の担い手は、これら魂・魄であろうと思われる。このような魂・魄にはこの他にもこのような働きがあることが指摘されている。

例文9①

「先儒（鄭玄）の言う『口と鼻の呼吸が魂で、耳が聞こえ、目が見えるのは魄である』（礼記・祭義）』もまた、ただ大まかなことしか言っていない。もっと根源的なことがある。それは、『坎』の水と『離』の火ということなのである。暖かい気が魂であり、冷たい気が魄である。魂は気の神であり、魄は精⁷の神である。考えたり、計略を練ることができるのが魂であり、過ぎ去ったことを記憶できるのが魄である。」

「先儒言：『口鼻之嘘吸為魂，耳目之聰明為魄。』也只說得大概。卻更有箇母子，這便是坎離水火。煖氣便是魂，冷氣便是魄。魂便是氣之神，魄便是精之神；會思量討度底便是魂，會記當⁸去底便是魄。」（『朱子語類』卷3（14卷. p. 163））

例文9②

人が思慮したり、計略を練ったりできるのは魂の働きである。記憶したり、弁別できるのは魄の働きである。

人之能思慮計畫者，魂之為也；能記憶辯別者，魄之為也。（『朱子語類』卷3（14卷. p. 165））

以上のように魂・魄には、上記の他にも、魂は、思慮を凝らす、計略を練る働きがあり、暖かく、魄は、感覚作用や、過ぎ去ったことを記憶する、弁別する働きがあり、冷たいと考えられていた。

また、魂・魄については、このようにも言われる。

例文10

動くのは魂であり、静かなのが魄である。「動静」という語は、魂、魄を言いつくしている。運用したり、行為できるのは、全て魂であり、魄はできないのである。人が活動できるのは全て魂がそうさせているからである。魂がもし去ってしまえば魄はできないのである。

動者，魂也；靜者，魄也。「動靜」二字括盡魂魄。凡能運用作為，皆魂也，魄則不能也。今人之所以能運動，都是魂使之爾。魂若去，魄則不能也。（『朱子語類』卷3（14卷. p. 164））

以上のように朱熹にとって、魂には動きがある一方、魄には動きがなく、静かであり、計略を練ったり、活動したりすることはできないと考えられたものであった。上述した魂・魄それぞれの働きの違いは、このような魂・魄それぞれの性質の違いを反映しているものと考えられていたであろうことは十分予想がつく。

以上のことから、人間の個体における魂と魄がそれぞれいかなる役割を持つのかを明らかにすることができたが、ところで、澄んだ気（氣）を支配する魂が能動性を強く持つ一方、濁った気（質）を支配する魄が能動性に欠けた働きをすると考えられたのは、なぜであろうか？それは、我々の気は、天地の感応する気を受けて成立したものであるため、その感応する気が澄んでいる場合は、より一層能動性をもった働きをし、気が濁っている場合は、より一層能動性に乏しい働きをすると考えられたためであろうと思われる。もちろん、この際の気の感応は、木下鉄矢氏（1992）⁹が指摘されるような自己感応・対他感応として展開しているものであるため、たんに自己内におけるのみならず、また他者に対しても、あるいはたんに受信のみならず、また発信もある、自己・対他の、さらには受信・発信の両面にわたって働くものと考えられていたはずである。それでは、感応する気である澄んだ気（氣）、濁った気（質）、あるいは、気を支配する魂、質を主宰する魄とは、具体的にはどんなものを指して言っているのだろうか？

②気・質、魂・魄とは何か

例文11

質問した、「目について言えば、目のなかの輪は体です。目のなかの光は魄です。耳はどうですか？」答えた、「穴が体である。聞こえるのが魄である。」

問：「以目言之，目之輪，體也；睛之明，魄也。耳則如何？」曰：「竅即體也，聰即魄也。」（『朱子語類』卷3（14卷. p. 165））

上記の耳における穴（竅）とは、目の光に対して言っていることから、物質的な穴と言うより、感覚器官として機能している穴¹⁰のことを言っていると思われる。このように考えてみると、この例文から、魄とは、何らかの固形的、物質的な個体を指しているのではなく、むしろ、ある種の働きにかかわる動的なものを指しているということがわかる。

このことに関して、朱熹はこうも言っている。

例文12①

あるものが質問した、『『気が入り出すのが魂で、耳が聞こえ、目が見えるのが魄である』（礼記・祭義・鄭玄注）。そうであるならば、魄の中にまた魂があり、魂の中にま

た魄があるのですか？」答えた、「精¹¹と気はあまねくゆきわたって一身の中で充滿している。呼吸や、目が見える、耳が聞こえるというのは（外に）発現するのでわかりやすいだけなのである。しかしながら、あまねくゆきわたって一身の中で充滿している以上¹²、鼻の嗅覚、口の味覚は魄ではないだろうか？耳や目の中に全て暖かい気があるのは魂ではないだろうか？これを全身に及ぼしてゆけば、すべてこのとおりである。」

或問：「『氣之出入者為魂，耳目之聰明為魄。』然則魄中復有魂，魂中復有魄耶？」

曰：「精氣周流，充滿於一身之中，嘘吸聰明，乃其發而易見者耳。然既周流充滿於一身之中，則鼻之知臭，口之知味，非魄乎？耳目之中皆有暖氣，非魂乎？推之遍體，莫不皆然。（『朱子語類』卷3（14卷. p. 165））」

例文12②

「二用に爻位無く、周く六虚に流行す。」（『周易參同契』上）二用とは、用九、用六、のことであり、九、六は、また坎、離のことである。六虚とは乾、坤の初九/初六、九二/六二、九三/六三、九四/六四、九五/六五、上九/上六の爻位のことである。二用には爻位がなくても、まるで精¹³・気が個体にあって上に下にあまねくゆきわたって固定した場所がないように、常に乾、坤、六爻の間をあまねくゆきわたる、ということを行っているのである。

「二用無爻位，周流行六虚」，二用者，用九、用六，九、六亦〈坎〉，〈離〉也。六虚者，即〈乾〉〈坤〉之初、二、三、四、五、上六爻位也。言二用雖無爻位，而常周流乎〈乾〉，〈坤〉六爻之間，猶人之精氣上下周流乎一身而無定所也。（『朱子語類』卷125老氏 莊子書 參同契（17卷. p. 3917））」

上記の2つの例文から、朱熹が質も気も身体中をあまねく流れており、しかも、一定の場所にとどまることはなく、そのなかにあって、どれが魂で、どれが魄か、一見してわかるものではないと考えていたことが窺える。そして、そこにおいては、呼吸の働きや、耳や目の中に暖かい気があるから、魂が働いているのが始めてわかり、五感の働きがあるから、魄が働いているのがはじめてわかるのだという。

なお、この例文から、魂は、気を支配するものであることから、「気」とは、具体的には熱を発生する、呼吸の流れにあたると考えられていたことがわかった。

さらに、朱熹は魄について、こうも言っている。

例文13①

また言った、「目でよく見える、耳でよく聞こえるのは魄の作用である。老子の言う『營魄に載る』（10章）は、「營」はきらきら光るという意味であり、「魄」はきらきら光

る凝固したものである。」

又曰：「見於目而明，耳而聰者，是魄之用。老氏云『載營魄』，營是晶熒之義，魄是一箇晶光堅凝物事。（『朱子語類』卷3（14卷. p. 163））」

例文13②

質問した、「近頃、先生が『耳が聞こえ、目が見えるのが魄で、口や鼻が呼吸するのが魂である』（礼記・祭義・鄭玄注）は、この言葉は正しいのだが不完全だ」と言われていました。耳が聞こえ、目が見える原因が魄で、口や鼻が呼吸できる原因が魂であるということですか？」答えた、「そうだ。どうやら、魄には、ちゃんものの形象があって、どうも水晶に似ているようだ。だから、働くと、耳がよく聞こえ、目がよく見えるのである。」

問：「頃聞先生言，『耳目之精明者為魄，口鼻之噓吸者為魂』，以此語是而未盡。耳目之所以能精明者為魄，口鼻之所以能噓吸者為魂，是否？」曰：「然。看來魄有箇物事形象在裏面，恐如水晶相似，所以發出來為耳目之精明。」（『朱子語類』卷87祭義（17卷. p2979～80））」

このように魄とは、きらきらした凝固したものであり、ものの形象を水晶のように写し出すものであって、このために視覚、聴覚が働くと考えられていたことがわかった。

また魄が支配する質については、朱熹はこのように言っている。

例文14

輔広が質問した、「『中庸或問』上39には鄭玄の説を採って『口や鼻が呼吸するのが魂である。耳が聞こえ、目が見えるのが魄である。』（礼記・祭義・鄭玄注）」といい、先生は「これは、おそらく血気の類のことをいっている。口や鼻が呼吸するとは気のことを言っている。耳が聞こえ、目が見えるとは血のことを言っている。」と言われていきます。目が見えるのが血のことというのは結構ですが、耳が聞こえるのは、なぜ血のことというのですか？」答えた、「医者は耳は腎に属し、精血が盛んであれば、視覚が利き、精血が消滅すれば、耳が聞こえなくなると考えている。」

廣問：「《中庸或問》取鄭氏說云：『口鼻之噓吸者為魂，耳目之精明者為魄。』先生謂：『此蓋指血氣之類言之。口鼻之噓吸是以氣言之，耳目之精明是以血言之。』目之精明以血言，可也。耳之精明，何故亦以血言？」曰：「醫家以耳屬腎，精血盛則聽聰，精血耗則耳聾矣。」（『朱子語類』卷87祭義（17卷. p2983））」

この例文における、「耳が聞こえ、目が見えるとは血のことを言っている。」は、「耳が聞

こえ、目が見えるのが魄である。」を受けて言っているが、この内容は「口や鼻が呼吸するのが魂である。」を受けて、「口や鼻が呼吸するとは気のことを言っている。」と述べている文章に対応している。上記例文12で、気は、熱を発生する、呼吸の流れのことを言っていることはわかっているので、これと同じく、魄は質を支配するものであることから、質とは、血の流れである、ということがわかる。

ただし、ここにおける血の流れとは、現代におけるような物質としての無機質なそれではなく、それ単独で生命力を呈すると捉えられていた「いのちの気」としての血の流れである。

例文15

いにしえにおいて、鬘龜の儀式に犠牲の血を使ったことで、その龜はしばらく経つと靈妙な働きをしなくなってしまうので、いくらか生氣（いのちの気）をもってきて、それを受け継がせていたのだ、ということがわかる。

古者鬘龜用牲血，便是覺見那龜久後不靈了，又用些子生氣去接續他。（『朱子語類』卷3（14卷. p. 175））

なお、以上のように、「質」とはいのちの気としての血の流れを意味することがわかったので、例文14により、魄についてもこのように結論することができる。つまり、「魄」とは、それが濁った気（いのちの気としての血）の流れにありながらも、凝固してきらきら光り、水晶のように、ものの形象を写し出すもののことである。

③真元の気と呼吸の気

ところで、朱熹は呼吸の流れとしての気とは別に、真元の気というものにも触れていることは、山井湧氏（1978）¹⁴、三浦國雄氏（1983）¹⁵がすでに話題に挙げている。

例文16

質問した、「真元と外気はどうですか？」答えた、「真元とは、身体における『生氣』（いのちの気）のことだ。」質問した、「外気は真元の気に入り込むのですか？」答えた、「たとえ吸い込んでも、散じてしまい、はなから限度がある。しかし、その原理を言えば、互に通じている。」

問「真元外氣如何？」曰「真元是生氣在身上。」曰「外氣入真元氣否？」曰：「雖吸入，又散出，自有界限。但論其理，則相通。」（『朱子語類』卷138（18卷. p4273））

このように、朱熹は、身体には「生氣」（いのちの気）である「真元の気」があるとし、この真元の気は、外気を吸い込んでも、結局はそれを散じてしまうとしている。それでは、この真元の気は、呼吸の流れとしての気といったどういう関係にあるのか？それを解明す

るために、朱熹が呼吸をどうやって捉えていたのかを確認しておきたい。

例文17①

人間は気を吐くとき、意外にも腹が膨らみ、気を吸うとき、意外にも腹がへこむ。考えてみれば、吐いたら腹がへこみ、吸ったら腹が膨らむのが妥当である。こうであるのは、気を吐くときは、この第一の気が出て、第二の気がまた発生するために、その腹が膨らむのであり、気を吸うときは、その発生した気がまた中から追って出ようとするために、その腹がへこむのである。人間は誕生して死ぬまで、その気はひたすら出てゆくばかりであり、出尽くしたら死ぬのである。気を吸うときは、外気を吸って入れているのではなく、ただ少しとどまって、第二の気がまた出てゆくだけなのであり、もし出せなくなったら死ぬのである。老子が言うには「天地の間は、それ猶お橐籥のごときか？動けども屈せず、虚しけれどもいよいよ出る」（『老子』5章）。橐籥とは今のふいごに他ならない。

人呼氣時，腹卻脹，吸氣時，腹卻厭。論來，呼而腹厭，吸而腹脹，乃是。今若此者，蓋呼氣時，此一口氣雖出，第二口氣復生，故其腹脹，及吸氣時，其所生之氣又從裏趕出，故其腹卻厭。大凡人生至死，其氣只管出，出盡便死。如吸氣時，非是吸外氣而入，只是住得一霎時，第二口氣又出，若無得出時便死。老子曰「天地之間，其猶橐籥乎，動而不屈，虚而愈出。」橐籥只是今之鞴扇耳。（『朱子語類』卷1（14卷. p121～122））

例文17②

大体は、人間の気は常に上っている。話をすれば、気はすべて上って出ていってしまっているのである。

大率人之氣常上。且如¹⁶說話，氣都出上去。（『朱子語類』卷3（14卷. p165～6））

例文17③

鼻から気が出入りする場合、出るのが陽で、取り戻すのが陰だ。息を吸うのは、貝類が殻を出たら縮まって入り込むのに似ていて、その出尽くしていないものを収め入れるのだ。もし、ひたすら出ていくのにまかせて、取り収めなければ死んでしまう。

如¹⁷鼻氣之出入，出者為陽，收回者為陰。入息，如螺螄出殼了縮入相似，是收入那出不盡底。若只管出去不收，便死矣。（『朱子語類』卷74（16卷. p2511））

以上のように、朱熹は呼吸において、気を吐くときは、第一の気が出て、第二の気がまた発生するために、その腹が膨らむとし、気を吸うときその腹がへこむのは、その発生した気が、また中から追って出ようとするため、気を吸うとは、外気を吸って入れているので

はなく、まだ出し尽くしていない気を取め入れているのだと考えていたことが窺える。そして、気がひたすら出てゆくのに任せて取り取めなければ、死んでしまうのだという。人間は誕生して死ぬまで、その気はひたすら出てゆくばかりであり、出尽くしたら死ぬのだという。このような呼吸観を踏まえ、朱熹はこのような呼吸法による延命術にも触れている。

例文18①

質問した、「人が死ぬ時は、初めたくさんの気を受けていますが、気が尽きてしまえば、無くなってしまうのですか？」答えた、「そうだ。」質問した、「そうであるならば、天地の造化と無関係になりますね。」答えた、「死と生には天命があって、初め気を受けた時に定まっている。天地の造化に他ならない。たくさんの気をもっていて、保持することができれば、延命することができる。もし私と誰かがともに10割持っているなら、ともに2割吐き出す。私が2割吐き出して取り戻し、取り戻すのが2割に及んだとき、その人はすでに4割吐き出してしまう。だから、私は少し延命できる。」

問「人死時，是當初稟得許多氣，氣盡則無否？」曰「是。」曰「如此，則與天地造化不相干。」曰「死生有命，當初稟得氣時便定了，便是天地造化。只有許多氣，能保之亦可延。且如我與人俱有十分，俱已用出二分。我才用出二分便收回，及收回二分時，那人已用出四分了，所以我便能少延。」（『朱子語類』卷3（14卷. p166））

例文18②

また言った、「氣に專にして柔を致す」（『老子』10章）は、「守」の字ではなく、「專」の字であるのは、ここに専心して、全く放出しないようにすれば、氣は細くなるということである。少しでも放出してしまえば、粗大になってしまうのである。

又曰：「專氣致柔，不是『守』字，卻是『專』字。便只是¹⁸專在此，全不放出，氣便細。若放些子出，便粗了也。」（『朱子語類』卷3（14卷. p164））

以上の事例を踏まえれば、朱熹のいう呼吸としての気の流れとは、究極的には、真元の氣（いのちの氣）のことを意味していたことが窺える。言い換えれば、「氣」とは、真元の氣（いのちの氣）に由来する、熱を発生する、呼吸の流れのことである。

④魂・魄、氣・質の違い

以上の考察から、氣・質、魄とはいかなるものであるかが分かったが、魂や魄は氣や質とどう異なるものなのであろうか？また、魂とはどのようなものなのであろうか？

例文19①

魄とは、形の神である。魂とは氣の神である。魂、魄とは肉体の精粹であり、これを靈と言うのである。

曰：「魄者，形之神；魂者，氣之神。魂魄是形氣之精英，謂之靈。」（『朱子語類』卷87祭義（17卷. p2981））

例文19②

潘¹⁹が質問した、「魄は体に付き、気は魂に付く。このように考えていいのですか？」
答えた、「付くんじゃない。魂魄は、肉体の精粹である。」

潘問：「魄附於體，氣附於魂，可作如此看否？」曰：「也²⁰不是附。魂魄是形氣之精英。」（『朱子語類』卷87祭義（17卷. p2981））

以上の実例から魂・魄は、ある種の独自の個体として、気・質にくっついているのではなく、この身体を作り、この肉体を働かせる血と呼吸の流れにおけるその「精粹」たるものを指しているということが分かる。それでは、ここにおける精粹たるもの（精英）とは、はたしてどういうことを意味しているのであろうか？これについて朱熹はこういう発言を残している。

例文20

『易経』には「精氣物を為す」（繫辞上）と言う。精²¹・気によって言うなら、精・気があつて初めて魂・魄がある。ひたすら出てゆく気が魂であり、精が魄だ。例えば、香をたく場合、焼いて出てきた汁が魄で、あの煙が出た後の香りが魂だ。

《易》言『精氣為物』。若以精氣言，則是有精氣者，方有魂魄。但出底氣便是魂，精便是魄。譬如燒香，燒得出來底汁子便是魄，那成煙後香底便是魂。（『朱子語類』卷68易四 乾上（16卷. p. 2259～60））

以上の発言において、朱熹は、魂と気の違いについて、魂を香をたいた際の煙が出た後の香りに例えている。ということは、真元の気に基づく、熱を発生する、呼吸の流れのうち、昇る煙に匹敵するものが、気ということになり、魂とは、煙が出た後の香りに匹敵する、気の中でもエッセンスにあたるものことということになろう。さらには、魄と血の違いについても、同様に、魄も血の中でエッセンスにあたるものということになる。また、上述における精粹たるもの（精英）というのも、このようなエッセンスのことを言っていたということがわかる。²²

なお、朱熹はこうも言っている。

例文21

質問した、「先生は、かつて体²³と魄はもともと別物だと言われました。そうであるならば、魂と気もまた別物ですか？」答えた、「魂と気について精細に論究してゆけば、同じく精・粗（の違い）がある。ただその精・粗の違いは極めて微細で、体と魄が懸け

離れているほどではない。」

問：「先生嘗言，體魄自是二物。然則魂氣亦為兩物耶？」曰：「將魂氣細推之，亦有精粗；但其為精粗也甚微，非若體魄之懸殊耳。」（『朱子語類』卷3（14卷. p.165））

上記例文における魂・魄の「精」（精妙である）、気・質の「粗」（きめ荒く、粗雑）とは、上記例文20の内容に対応して言っていることは間違いない。ここにおいて、朱熹は、魂と気はその精妙・粗雑の違いが極めて少なく、魄と質はその精妙・粗雑の違いが極めてかけ離れていると、それらの違いについて言及している。この認識は、恐らく気が気体に類し、質が液体と、それを基礎に展開した固体に類すると考えられたことに基づいてでてきたものであろう。液体と固体のほうが気体どうしよりも違いが大きいと考えるのはごく普通の考え方である。

⑤気・魂と質・魄との連携、連続

ところで、魂・魄はそれぞれただ単独で働くだけでなく、互い連携して働いてもいるとされる。

例文22

また言った、「陰は主として受け入れ、陽は主として運用する。記憶できるというのは、全て魄が受け入れているのである。運用して、発現するのが魂である。この二つはもとから互い離れることがないものだ。彼が記憶できるのが魄であるが、発現するのが魂である。知覚できるのが魄であるが、知覚を発現するのが魂である。」

又曰：「陰主藏受，陽主運用。凡能記憶，皆魄之所藏受也，至於運用發出來是魂。這兩箇物事本不相離。他能記憶底是魄，然發出來底便是魂；能知覺底是魄，然知覺發出來底又是魂。」（『朱子語類』卷87祭義（17卷. p2979～80））

以上のように朱熹は、魂、魄は互い連携して働いており、そこにあつて、陰とは受け止めるものであつて、そのゆえに魄は、外からのものを受け止め、陽とは運用するものであつて、それゆえに魂は、運用して発現するとしている。そしてそれについて具体例を挙げているがそれは、三浦國雄氏（1981）²⁴の推論を参考に再整理してみると、魄が記憶するなら、魂がそれを受けて思い出すということであり、魄が感じ取るなら、魂がそれを受けて自覚するということを行ったものであろう。

また、例文12①における耳と目の中に暖かい気が流れているというのも、恐らく、魂・魄の連携を前提にして言っている発言であろうと思われる。

このように、魂と魄は、それぞれ単独で働くのみならず、互い連携して働くこともあるわ

けであるが、魂と魄の活動はむしろ、このように連携して働くほうが多かったと考えられていたと思われる。運動にしる、思考にしる、人間の様々な行動を例に挙げて考えてみると、連携しない例を挙げるほうが、むしろ困難であろうと思われる。なお、魂・魄はただ連携して働くのみならず、連続しており、そのような連続こそ生命が成立し続けている要因と考えられていた。

例文23

また言った、「魄が盛んであれば、耳が聞こえ、目が見えるし、記憶することができる。だから、老人がたいがい視野がぼんやりし、耳が聞こえなくなり、覚えることができないのは魄が衰えて消耗しているのである。老子10章に『營魄に載る』とあるのは、魂によって魄をしっかりと保つということである。というのも魂は熱く、魄は冷たい、魂は動き、魄は静かである。魂によって魄をしっかりと保つことができれば、魂は魄によって静かになり、魄は魂によって生命力を得る。魂は熱いものでありながら、涼しさを生じ、魄は冷たいものでありながら、暖かさを生じる。二つが互い離れないのでその陽は乾燥せず、その陰は滞らず、調和を得るのである。そうでなければ、魂はいつそう動き、魄はいつそう静かになり、魂はいつそう熱く、魄はいつそう冷たくなる。両者は互い離れれば調和を得られず死ぬのである。」

又曰：「魄盛、則耳目聰明、能記憶、所以老人多目昏耳聾、記事不得、便是魄衰而少也。《老子》云『載營魄。』是以魂守魄。蓋魂熱而魄冷、魂動而魄靜。能以魂守魄、則魂以所守而亦靜、魄以魂而有生意、魂之熱而生涼、魄之冷而生暖。惟二者不相離、故其陽不燥、其陰不滯、而得其和矣。不然、則魂愈動而魄愈靜、魂愈熱而魄愈冷。二者相離、則不得其和而死矣。」（『朱子語類』卷87祭義（17卷. p2979～80））

以上のように、朱熹は、生命が生命として存立しているのは、魂が魄をしっかりと保っていることによると考えていた。そこにおいて、魂は、魄のおかげで、静かになり、涼しさを生じ、乾燥しない。魄がなければ、いつそう動き、いつそう熱くなってしまうとされ、魄は魂のおかげで生命力をもち、暖かくなり、滞らない。魂がなければ、いつそう静かに、いつそう冷たくなってしまうとされた。言い換えれば、魂と魄は、片方だけでは調和が取れなくなり、個体は死んでしまうと考えられていたということになる。

なお、通常、死は、上述した通り、気、厳密には、そのうちの魂が魄から離れることによって訪れる。しかし、例外的に魄が魂から離れる場合など異常なときもあり、それが怪異を起こしている場合に当たることは、後藤俊瑞氏（1943）²⁵がすでに言及している。

5) 気質の通・塞論

①気質の通・塞、正・偏とは何か

以上の実例とその分析に基づき、朱熹はこの個体をどのように捉えていたのか、そのメカニズムの枠組みが分かったわけであるが、それでは、そのような個体を形成する気において、通るとか塞がるというのは、一体どういうことを言っているのでしょうか？

例文24①

その気の面からいえば、その正常で、かつ滞りなく通じているものを得ている場合は人となり、その不正常で、かつ塞がっているものを得ている場合は動植物²⁶となる。こういうわけで、貴かったり、賤しかったりして揃わないのである。その賤しく、物になったものは、身体の不正常、塞がりに制限されて、その本体の完全を充足することはできない。ただ人間という生き物だけが、その気の正常で、かつ滞りなく通じたものを得ていて、その性が最も貴いのである。だから、その心は、虚霊（捉われなく、靈妙に働いている）で全く透き通り、あらゆる理がことごとく備わっている。その禽獣と異なる原因は、まさしくここにあり、その堯や舜になって天地に参加し、化育を助けることができる原因もまたここから出るものではない。これがいわゆる明德である。しかしながら、その滞りなく通じているということについても、澄み、濁りの異なりがないわけにはゆかず、その正常ということについても、優れているものと劣悪なものとの異なりがないわけにはいかない。だから、その付与された実質は、澄んでいれば智力があり、濁っていれば愚鈍であり、優れていれば人品がよく、劣悪なものならば不肖なのであり、また同じではありえないのである。

以其氣而言之、則得其正且通者爲人、得其偏且塞者爲物。是以或貴或賤而不能齊也。彼賤而爲物者、既梏於形氣之偏塞而無以充其本體之全矣。唯人之生、乃得其氣之正且通者、而其性爲最貴。故其方寸之間、虚靈洞徹、萬理咸備。蓋其所以異於禽獸者正在於此、而其所以可爲堯舜、而能參天地以贊化育者亦不外焉。是則所謂明德者也。然其通也、或不能無清濁之異、其正也、或不能無美惡之殊。故其所賦之質清者智而濁者愚、美者賢而惡者不肖、又有不能同者。（『大学或問』上2（6卷 p 507））

上記の例文から、朱熹は、気（血と呼吸）のあり方に応じて、以下のような違いが生じると考えていたことが分かる。気が正常で、滞りなく通じていれば、人間となる。それに対し気が不正常で、塞がってれば、動植物となる。しかし、気が正常で、滞りなく通じているにしても、このうち正常というのには、「美」（優れている）と「悪」（劣悪である）とがあり、優れていれば、賢となり、劣悪であれば、不肖となるとされた。こうして、正常にしても優劣に応じて、人格の良し悪しの違いが起こるとされたのである。また、滞りなく通じているというのには、「清」（澄んでいる）と「濁」（濁っている）とがあり、澄んでいれば、

智（知力がある）となり、濁っていれば、愚（愚鈍である）となるとされた。こうして、滞りなく通じているにしても澄み・濁りに応じて、知力の良し悪しの違いが起こるとされたのである。

このことに関し朱熹はこうも言っている。

例文24②

質問「『大学或問』上2に『その正常で、滞りなく通じている中でもまた、澄み・濁りの異なりがないわけにはゆかない。だからその賦与された資質にもまた、知力がある・愚鈍である、人品が良い・不肖である、の違いがある。』といわれています。（中略）これはどういうことでしょうか？」答えた、「（前略）その賦与された資質には4種類ある。聡明で事理に明るいもので、知力があっても人品は良くない場合があるが、賦与された中に清らかで温和でつましい性質が欠けているのである。また、きわめて温和ではあるが、それほど事理に通暁していない人の場合は、人品が良くとも知力がないのである。」

問：「『或問』云：『於其正且通者之中，又或不能無清濁之異，故其所賦之質，又有智愚賢不肖之殊。』（中略）是如何？」曰：「（前略）蓋其所賦之質，便有此四様。聰明曉事者，智也而或不賢，便是稟賦中欠了清和溫恭之德。又有人極溫和而不甚曉事，便是賢而不智。」（『朱子語類』卷17大學四 或問上 經一章 此篇所謂在明明德一段（14卷、p. 575～576））」

以上のように、上記例文25①で、「賢」と言っていたのは、具体的には温和で慎ましいということであったことがわかる。これは、朱熹によって、つとに人格的理想形として挙げられていた「仁者」の特色の一つでもある。また、朱熹は人間には、知力がありながら、人品が良くないものもあるし、人品が良くても知力に乏しいものもあり、これらの資質は、すべて気の正・偏、通・塞のあり方を反映しているとしている。このことは、楠本正継氏（1964）²⁷が、先駆的に明らかにしている通り、朱熹にとって気の差別相は必ず見逃してはならないものであり、そのような朱熹が人間の抱える矛盾を一律にひっくるめて同じ原理で捉えるのではなく、気のあり方という視角を通じて、矛盾の諸相ひとつひとつに理論的に対応しようとしていたことを窺わせる。ところで、このような朱熹の考え方において、気が滞りなく通じているとか、塞がっているというのは、血、呼吸の流れを受けて言っていることは間違いのないと思われる。しかしながら、気が正常とはどういうことであろうか？また、その正常かどうかということと、滞りなく通じているかどうかはどう関わるのか？

これに関して、朱熹はこのように発言している。

例文25①

二氣、五行が互い感応し、幾通りにも変化してゆくので、人や動植物と言った生き物

には、精妙・粗雑の違いがあることになる。気そのものの面から言うならば、人と動植物は全てこの気を受けて誕生する。精妙・粗雑という面から言うならば、人はその気の正常で、かつ滞りなく通じているものを得ているものであり、動植物はその気の不正常で、かつ塞がったものを得ているものである。ただ人間だけがその気の正常を得ているために、理は滞りなく通じ、塞がれない²⁸のである。動植物は、その不正常なものを得ている為に、理は塞がれて識別する能力がないのである。たとえば、人間が、頭は丸くて天の形に相応し、足は四角で地の形に相応し、平正端直であるのは、天地の正常な気を受けているからである。だから、道理を識別し、知的能力があるのである。動植物は天地の不正常な気を受けている。だから、禽獣は横に成長し、草木は頭が下に向かって成長し、おしりが、反対に、上にあるのである。動植物にあつて、識別する能力があるものは、ただ一筋だけ通じているにすぎない。たとえば、鳥は孝行を知り、獼は祭祀を知り、犬はひたすら守ることができ、牛はただ耕すことができるのみである。

二氣五行，交感萬變，故人物之生，有精粗之不同。自一氣而言之，則人物皆受是氣而生；自精粗而言，則人得其氣之正且通者，物得其氣之偏且塞者。惟人得其正，故是理通而無所塞；物得其偏，故是理塞而無所知。且如人，頭圓象天，足方象地，平正端直，以其受天地之正氣，所以識道理，有知識。物受天地之偏氣，所以禽獸橫生，草木頭生向下，尾反在上。物之間有知者，不過只通得一路，如鳥之知孝，獼之知祭，犬但能守禦，牛但能耕而已。（『朱子語類』卷4 性理一 人物之性氣質之性（14卷. p194））

この発言から窺えるのは、気が正常とは、天地の気の正常なあり方を受けているということだったということである。そして、人間は、天地の気の正常なあり方を受けているので、気は滞りなく通じており、このため、道理を識別し、知的能力があると考えられ、それに対し、動植物は、天地の気の不正常なあり方を受けているので、気は塞がっており、このため、道理を知り、識別する能力がない（鳥、獼などを除いて）とされ、この結果が氣質の形状（例：頭は上にあつて、足は下にあつて四角）に反映すると考えられていたということである。この内容から、朱熹が気の正・偏と通・塞との関係、さらには形状との関係を、正・偏から通・塞、さらには形状へと至る因果関係によって捉えていたことが分かったわけであるが、それでは、ここで言われている天地の気が正常とは具体的にはどういうことを言っているのだろうか？

この件について、朱熹はこう発言している。

例文25②

太陽・月が清らかで明るく、気候が調和がとれて正常なときに人が生まれるならば、この気を受けて、清らかで明るく、渾厚（誠実で浮付かない）な気となり、良い人になる。もし太陽・月が暗く、寒暑が正常でなければ、全て天地の気が正常に背いているのであり、人間がもしこの気を受けたら、良くない人になるのはどうして疑えよう。

日月清明氣候和正之時，人生而稟此氣，則為清明渾厚之氣，須做箇好人；若是日月昏暗，寒暑反常，皆是天地之戾氣，人若稟此氣，則為不好底人，何疑！（『朱子語類』卷3（14卷. p198））

この例文における正常な気候のときに生まれると良い人格になり、不正常的な気候のときに生まれると良くない人格になるというのは、明らかに上述の正常な気の優・劣に対応して言っている発言である。これにより、この例文から、正常な気の優れたものとは、天地の気の流れの常態にかなない、調和がとれていることを言っているのであり、その劣ったものとは、天地の気の流れの常態にかなわず、調和がとれていないことを言っているということがわかる。ということは、気が不正常とは、天地の気の流れの常態に全くかなわない、異常なケースということになる。このことから、朱熹が言う気が正常かどうかというのは血、呼吸の流れのあり方全体の適・不適をさしていっていることが判明したと言える。

ところで、『朱子語類』には、朱熹がこの原理を応用して、さらに気の厚薄などと富貴貧賤の原因とを連動させて説明している事例が多々見られるが、この点に関しては、それがいかなるメカニズムのもとで捉えられていたか不明である。また、気の正・偏、清・濁について、朱熹の発言に概念の使い分けの面で、錯綜が見受けられるケースも見受けられるが、言わんとすることの枠組みには変動は見受けられない。

以上の事例とその分析により、我々の思考、行為、感受作用、生命の存否を気の流れによって捉えていた朱熹は、個体の有する知力や人格の良し悪しについても、気の流れを反映して現れたものだと考えていたことが分かった。このように現代日本人が、こころや脳の問題として考えるようなことも、気の問題として捉えていたということは、朱熹の哲学の拠って立っている場所が、現代日本人のそれと全く異なるパラダイムに基づくものであったことを明確にしている。

3. まとめ

朱熹にとって我々における身体のみならず、こころも、視覚作用も、聴覚作用も、動作・行為も、気に拠る働きに他ならなかった。

気は、天地において一定の秩序をもって集散する「感応する」働きをしているものと考えられていたわけであるが、我々の個体も、このような気の、天に由来する気と、地に由来する質とが感応して形成されると考えられていた。発生の際は、まず形が形成され、それに伴って魄ができたなら、次に魂が形成されると考えられていた。そして、やがて個体は増え続け大きくなってゆくが、極点に達すると、しだいに散じ、衰退してゆき、最後には気と魂は天に帰り、質と魄は地に帰ることとなると考えられた。

我々の個体にあって、天に由来する気は、具体的には、いのちの気である真元の気由来する、熱を生じると考えられていた呼吸の流れにあたるとされ、これは気の澄んだものとも言われていた。地に由来する質は、具体的には、同じくいのちの気としての血の流れにあたるとされ、これは気の濁ったものと位置づけられていた。このような気・質は、身体中をあまねく流れており、一定の場所に留まることはないと考えられていたが、こういう気・質のなかであって、それぞれそのエッセンスたるものがあり、それが、各自、魂・魄と言われていた。

これら魂・魄も、同じく身体中を流れ、固体的なものとは捉えられていなかったわけであるが、魂は、気を支配し、個体に運動させたり、思慮を働かせたり、計略を練ったりさせる役割を担い、魄は、凝固してきらきら光るものだけに、水晶のように、形象を写し出すことを通じて、感受作用や、記憶作用となって働き、また弁別したり、骨、肉、皮、毛を作り上げる役割を担うと考えられていた。澄んだ気（気）を支配する魂が能動性を強く持つ一方、濁った気（質）を支配する魄が能動性に欠けた働きをされると考えられたのは、我々の気は、天地の感応する気を受けて成立したものであるため、その感応する気が澄んでいる場合は、より一層能動性をもった働きをし、気が濁っている場合は、より一層能動性に乏しい働きをされると考えられたためであろうと思われる。もちろん、この際の気の感応は、木下鉄矢氏（1992）が指摘されるような自己感応・対他感応として展開しているものであるため、自己・他者の両面、さらには受信・発信の両面にわたって働くものと考えられていたはずである。

魂と魄はそれぞれ単独で働くこともあるが、多くは連携して働いていると考えられていたと思われる。この際、魄は外からのものを受け止め、魂は運用して発現する役割を発揮すると考えられていた。たとえば、魄が記憶したものをうけて、魂により記憶が発出し、思い出され、魄が知覚したものをうけて、魂により知覚が発出し、自覚されるという具合にである。さらにまた、これらの魂と魄は連続しているからこそ、魂は、魄のおかげで、静かになり、涼しさを生じ、乾燥しなくなり、魄は、魂のおかげで、生命力をもち、暖かくなり、滞らなくなり、生命が生命として存立しえているのだと考えられていた。

生命の終焉に関しては、天に由来する気は、誕生してから死まで、ひたすら昇って出ているものと考えられ、通常は、この気、厳密にはそのうちのエッセンスたる魂が出尽くした（＝魄から離れる）ときが死ぬときだと考えられていた。そこで、このような気にまつわる延命術が呼吸法によって図られたりしたわけであるが、例外的に、質を支配する魄が先に魂から離れる場合があり、そういう場合が怪異を起こす場合にあたるのだと考えられた。

このように、朱熹は、我々の個体そのもの、さらには思考、行為、感受作用、生命の存否に至るまでを、感応する天に由来する気（呼吸の流れ）と、それを支配する魂（呼吸の流れのエッセンス）、地に由来する質（血の流れ）と、それを支配する魄（血の流れのエッセンス）という「気の流れ」によって全て捉えていたことが明瞭となったわけであるが、このよ

うな気の流れのあり方そのものが、人格的良し悪しや、知力的良し悪しに反映しているとも考えていた。具体的には、気の流れ全体が天地の気の流れの常態にかなない、調和がとれていれば、温和で慎ましい人格になり、逆に天地の気の流れの常態にかなわず、調和がとれていなければ不肖となり、また気の流れが澄んでいれば、知力があり、逆に、濁っていれば、愚鈍となるというのである。また、朱熹はこの論理を応用して、それぞれの存在において種差が生じている原因をも一貫した原理で説明しようとした。また、細目は不明であるが、気の厚薄などと富貴貧賤寿夭の原因とを連動させて捉えていたことも事実である。

こうして見てみると、朱熹の気質認識は、石田秀実氏（1987）が先駆的に明らかにした漢民族の伝統的な身体像＝「流れる身体」観を受けて形成されたものであることが明瞭である。しかしながら、それは『黄帝内経・素問』『黄帝内経・靈枢』などにおけるそれに比し、その概念の意味付け、扱いに相当数の手が加えられたものであり、それは、あくまで漢民族における伝統的な諸典籍、宋学の諸思索を総合したうえでの朱熹特有の気質論へと姿を変えたものなのである。いずれにしろ、このように現代日本人が、こころや脳の問題として考えるようなことも、気の問題として捉えていたということは、朱熹の哲学の拠って立っている場所が、現代日本人のそれと全く異なるパラダイムに基づくものであったことを明確にしている。

以上のように、本論においては、朱熹が気質という概念を通して、人間という個体がどう成立していると考えていたのかそのメカニズムを明らかにし、さらには、塞がる・通ると言っているのはどういうことなのかを明らかにした。このようにして考えてみると、朱熹の捉えていた気質は、これだけで、あたかも人間全てを語れそうなくらい説明が完結を見ているようにも思える。しかしながら、朱熹はこの上さらに「心」という概念にも言及しているのは周知の事実である。そこで、次稿にあっては、朱熹にとってそもそも「心」とは何のことを言っていたのであり、この気質にあって「心」とはいかなる役割と位置を持つものであると考えられていたのかに迫りたいと思う。

4. 参考文献

- 吾妻重二 （2004）『朱子学の新研究』創文社（1984の論文所収）
 石田秀実 （1987）『気・流れる身体』平河出版社
 石田秀実 （1992）『中国医学思想史』東京大学出版会
 大濱皓 （1983）『朱子の哲学』東京大学出版会
 市来津由彦 （2004）「朱熹の知覚説」（『中国思想における身体・自然・信仰 坂出祥伸 退休記念論集』東方書店）
 木下鉄矢 （1999）『朱熹再読』研文出版（1992の論文所収）

- 楠本正継 (1964) 『宋明時代儒学思想の研究』 広池学園出版部
- 後藤俊瑞 (1943) 『朱子』 東洋思想叢書 日本評論社
- 早川雅子 (1999) 「朱子の『身の思想』をめぐって－『東アジアにおける身の思想の展開』に関する一考察－」 『目白大学人文学部紀要』 地域文化篇 5
- 三浦國雄 (1997) 『朱子と気と身体』 平凡社 (1981, 1983の論文所収)
- 三浦國雄 (2008) 『「朱子語類」抄』 講談社学術文庫
- 山田慶児 (1978) 『朱子の自然学』 岩波書店
- 山田慶児 (1999) 『中国医学はいかにつくられたか』 岩波新書
- 山井湧 (1980) 『明清思想史の研究』 東京大学出版会 (1978論文収載)
- 『朱子語類』 訳注 卷1 - 3 (2006) 汲古書院
- 『朱子 王陽明』 世界の名著 (1978) 中央公論社
- 森立之 (2002) 『素問考注』 中医薬典籍与學術流派研究叢書 学苑出版社、北京
- 洪江抽斎 (2003) 『靈枢講義』 中医薬典籍与學術流派研究叢書 学苑出版社、北京

¹ 自 却 (『古代漢語虚詞詞典』 商務印書館、1999)

² P. 223

³ 生聚 通常、人口を増やし、財物を集める意味で用いられる。この文例では「集める」ほどの意で使われているものと思われる。

⁴ P. 95

⁵ 気・質は、朱熹が発言していた際に念頭に置いていた經典などの違いから、気がときに、精と言われたり、質が、ときに精とも、形とも、体とも、また血とも言われたりするが、言わんとすることは思想の構造上全く変わらない。例：清者は氣，濁者は形。氣是魂，謂之精；血是魄，謂之質。所謂「精氣為物」(『朱子語類』 卷3 (14卷. p. 159))、本論文所載の例文8、『周易本義』 繫辭上「精氣為物」への注釈など。

⁶ この文は、ある記録者の記事に別人(ここでは、周明作)の記録を挿入して形成されたものであるため、このような表記がされている。これは『朱子語類』が、多くの人の記録を集成して出来上がったという事情を反映している。本論が所依とする『朱子全書』もそれをそのまま掲載しており、本論においては、この表記をあえて訳出することはしなかったが、原文はそのまま掲載することとした。

⁷ 注5参照。

⁸ 當 助詞「着」(張相『詩詞曲語辭彙釈』 中華書局、1991)

⁹ P. 44~45

¹⁰ 穴(竅)『黄帝内経・素問』 生氣通天論篇では、「陽不勝其陰、則五藏氣爭、九竅不通」などと言われ、穴(竅)が、単なる空洞ではなく、体内の気の巡りと有機的に連動して作用しているものとして言われている。

¹¹ 注5参照。この場合の精は、質と同意。

¹² ~している以上 原文は「既~則」の構文をとっているため、このように訳したが、「既」は「た

とえ〜であっても」の意味でもちいられることもあり（『古代漢語虚詞詞典』商務印書館、1994）、この文例における真意はむしろこちらのほうであると思われる。ただし、「たとえ〜であっても」の意味で用いられるさい「既〜則」という句形を取ることもあるかどうか、語学的な裏づけを得られなかったので、この意味では訳せなかった。

¹³ 注11参照。

¹⁴ P. 47

¹⁵ P. 195～197

¹⁶ 如 至于（『古今漢語詞典』商務印書館、2002）

¹⁷ 注16と同じ。

¹⁸ 只是 就是（『漢語大詞典』）

¹⁹ 潘 誰のことを言っているのか不明。

²⁰ 也 不明。元代の戯曲ならば、襯字か、加強語気詞の可能性が想定される。（張相『詩詞曲語辭彙釈』中華書局、1991。『近代漢語大詞典』中華書局、2008）

²¹ 注5参照

²² 朱熹は、ここからさらに、魂・魄が普段どこにあり、どう動いているのかまでは考えつめることはしなかったようだ。（「医者は「心は神を貯蔵し、脾は意を貯蔵し、肝は魂を貯蔵し、肺は魄を貯蔵し、腎は精と志を貯蔵する」（『黄帝内経素問』宣明五気、『黄帝内経靈枢』本神）と言いますが、邵康節の言うことと異なっています。」答えた、「これは、わからない。」）（「醫家言『心藏神，脾藏意，肝藏魂，肺藏魄，腎藏精與志。』與康節所說不同。」曰：「此不可曉。」）（『朱子語類』卷138雜類（17卷. p. 4274））

²³ 注5参照。

²⁴ P. 99

²⁵ P. 235

²⁶ 物 動植物、鉱物などのこと（後藤1943 p. 225～227）

²⁷ P. 224. 229～230

²⁸ 「理は滞りなく通じ、塞がれない」は、この文脈においては、訳文のとおり、理のことを指しているものということになるが、朱熹は実体としては気以外になにもものをも想定しておらず、理とはこのような実体としての気に備わる適度性・適切性をもたらせる働きを指していったものに過ぎない。したがって、この発言からも朱熹の氣質観を窺うことが可能である。

Che Tzu (朱子)'s theory of body (氣質論)

TSUJII, Yoshiteru

Chu Tzu (朱子1130-1200) was on ground the ancient Chinese paradigm of thoughts in which there were many differences from ours today. In this thesis, I shall systematically make his theory of body clear which is one of typical ideas of the intellectual paradigm. Chu Tzu's idea is that the body constitutes the fluid substance—Qi (氣)—which is made out of the breath from the heaven (天), and of the blood called Chih (質) out of the earth (地). The breath has the power making our body move and think, controlled by Huen (魂)—the essence of the breath—through the laws of motion called Kan Ying (感應). The blood has the power of promoting our sense and ability of remembering and making substances of body, controlled by Po (魄)—the essence of blood—as well as the breath. Chu Tzu identified our bodies as an union of Qi, Huen, Chih and Po which mainly worked together but sometimes worked individually. Chu Tzu also thought that the states of Qi and Chih decided whether our characters would become good or not and clever or not. Chu Tzu grounded main subject of his philosophy such as Qi Chih Pien Ke (氣質變革) on these thought of body.